

始良 Tn 火山灰の C-14 年代のクロスチェック

Radiocarbon dating of the Aira-Tn ash

宮入 陽介[1], 吉田 邦夫[2], 宮崎 ゆみ子[3], 小原 圭一[3], 兼岡 一郎[4]

Yousuke Miyairi[1], Kunio Yoshida[2], Yumiko Miyazaki[3], Keiichi Ohara[3], Ichiro Kaneoka[4]

[1] 東大・地震研, [2] 東大・総博, [3] 東大・博物館, [4] 東大地震研

[1] E.R.I., Tokyo Univ, [2] Univ. Museum, Univ. of Tokyo, [3] University Museum, University of Tokyo, [4] ERI, Univ. Tokyo

<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/KANEOKA-LAB/title.html>

東大の年代測定室では、今までに 線計数法（気体比例計数管）を用いて 1000 試料を越える C-14 年代を測定してきた。その中で過去に測定された始良 Tn 火山灰（AT）層の C-14 年代は、2,480～38,900yrBP と大きな開きのある年代値が報告されている。

今回、それらの 線計数法で測定されたものと同じの残存試料を用いて東大原子力研究総合センターのタンデム加速器を利用して加速器質量分析法（AMS 法）による C-14 年代のクロスチェックを行った。その結果、22,800～25,000yrBP というまとまった年代値が得られた。

東大の年代測定室では、今までに 線計数法（気体比例計数管）を用いて 1000 試料を越える C-14 年代を測定してきた。その中で過去に測定された始良 Tn 火山灰（AT）層の C-14 年代は、2,480～38,900yrBP と大きな開きのある年代値が報告されている。（合計 6 試料）(Sato et al., 1971; Kobayashi et al., 1971 など)

今回、それらの 線計数法で測定されたものと同じの残存試料を用いて東大原子力研究総合センターのタンデム加速器を利用して加速器質量分析法（AMS 法）による C-14 年代のクロスチェックを行った。その結果、残存試料の内、3 試料より 6 カ所を AMS 法により測定したところ 22,800～25,000yrBP というまとまった年代値が得られた。